

ジェイン・オースティンの手紙

塩谷清人

今のところもつとも信頼のおけるR・W・チャップマン(Chapman)編の『ジェイン・オースティンの手紙』(二九三三)によれば、ジェイン・オースティンの手紙は彼女の二〇歳(二七九六)の時の手紙から四一歳(二八一七)の亡くなる一月ちよつと前まで一四八通が残っている。これは彼女の習作時代の一七九〇年代前半を除けば、その創作活動全体とはほぼ重なっていることになる。彼女の小説の読者にとつてはその執筆時期に彼女がどのような手紙を書いていたのか、小説読解の手がかりになるようなことを書いていないか、といった興味がある。例えばロンドンに出た時の手紙「私は観光よりも人間が好きだからつき合ひの方がいい」という文面はオースティンの興味のありかをはつきり自身で示してくれている。また二〇歳代と三〇歳代では関心、興味のありかも当然変化しているから、それと彼女の前期、後期の小説との関連を探ることもできるだろう。そのような点を視野に入れながら、オースティンの手紙を調べて見ようと思う。

一四八通のうち九〇通は三歳弱年上で唯一の姉のカサンドラ (Cassandra) 宛のもので、残りの五八通の大部分は兄弟や姪や甥、そして友人のマーサ・ロイド (Martha Lloyd) などに宛てたものである。あとで述べられるように一番好きな四番目の兄ヘンリー (Henry) への手紙など残っていないから、これはあくまで現存している手紙についての話である。とにかく三分の二弱が姉宛に書かれている。カサンドラもジェイン・オースティンと同じく生涯を独身で過ごした人であり、当然同じ屋根の下で過ごすことが多かったが、この姉妹はしばしば別れて親戚の家、特に三番目の兄エドワード (Edward) の所へしばしば行き、そこで長居した。時にはそれは数カ月に及んだ。エドワードは八人の兄弟の中では物質的に一番恵まれた人でケントのゴドマーシヤム (Godmersham) に広大な屋敷を持っていた。姉妹は彼の妻エリザベス (Elizabeth) とは幼い頃からの友人であつたから、自然そこへ行く機会が多かつたのである。エドワード家は最終的には一人の子沢山であつたから、その相手をするとということもあつた。いづれにしてもカサンドラとジェインは別れていた間頻繁に手紙を交換している。現在われわれはそれを読むわけである。といつてもカサンドラからジェイン宛の手紙は一切残っていないのは次の理由による。

姉のカサンドラはジェインの遺言で一切を相続したが、その遺品である書簡類の処理はカサンドラに委された。そして彼女は独断でジェイン宛のほとんどの手紙を処分してしまつたらしい。このカサンドラの一種の検閲はもつと大きな問題を提供している。ジェイン自身の手紙もかなりその被害にあつてゐるのだ。約二〇年間に、七回ほど長期間手紙が残っていない時がある。その期間は合計すると一一年半にも及ぶ。つまり二〇年間の半分以上の期間の手紙がない。長期間この姉妹が他所へ行かなかつたか、一緒だつたりして手紙を書く必

要がなかったという可能性は彼女たちの行動パターンからちよつと考えにくいから、その欠落部分の手紙はカサンドラが処分したためとするのが一番説得的であるし、姪キャロライン(Caroline)の証言もある。「叔母のカサンドラに宛てた彼女「ジェイン」の手紙はかなり開けつ広げで、打ち解けたものであつたから、叔母はその手紙を死ぬ三、四年前に焼却してしまつた」カサンドラはジェインの死後もおよそ三〇年近く(一八四五年まで)生きた。彼女は、死後有名になつていつたジェイン・オースティンの評価に傷をつけるような手紙をとにかく残したくなかつたのであろう。後で述べるように処分を逃れた手紙の中にも知人、近隣の人々に対する痛烈な、辛辣な描写がある。たぶん同様の、あるいはそれ以上の激しい文面がその処分された手紙にはあつたのではないだろうか。またこの七回に及ぶ空白期のいくつかはさまざま嫌な、不愉快な体験があつた時期、気分滅入る時期と重なるとも言われている。それが反映した手紙も妹思ひのカサンドラには残す必要のないものであつた。とにかく私信をパブリックにすること自体の抵抗感もあつて、多くの手紙は処分された。

手紙は受け取り手によつて書き方が変わる。オースティンの手紙も姉宛とその他の兄弟や親戚宛とでは微妙に内容や文体が違つている。姉宛といつても当時は両親など家族の者にも読んで聞かせることが普通であつたから、ある程度の節度はあるが、それでも気心の知れた相手であり、共通の話題は多いから自然饒舌になる。瑣末と思えることも紙面に余裕のある限り書く。お互い興味をもっているかなり日常的なことも多くなる。彼女の小説の美学では極力排除されている出産や死亡のニュース(『マンスフィールド・パーク』のように間接的に言及されることはあるが)ももちろん書かれてゐる。一方その他の人に宛てたものは、一層簡潔に要点を押さえた書き方をする。また当時は郵便料金は受取人払いで、六ペンス位であつたから、あまり余計なことを書いて相

手の負担になるようなことも避けたかったわけだ。手紙の多くは近況報告である。当時の女性の手紙は、男性側からの押しつけられた固定観念もあって、政治や社会変動などがほとんど書かれない。唯一例外的なのは、すぐ上の兄フランシス（Francis）と弟チャールズ（Charles）が海軍に入っていて海外で戦っている関係から、戦況について心配したり、兄弟の昇進のことを書いたりしていることである。オースティンの小説にもその傾向は顕著であるが、政治や社会情勢のことは男性の領域とされ、女性の会話にはふさわしくないのだ。自然、身辺のこと、知り合いの動向が中心になる。一番取り上げられる話題は衣服のことで、女性ならではの細かい説明があり、乏しい予算で流行に遅れないよう、また自分に合った服や帽子を選んでいる姿が彷彿としてくる。そしてさまざまな会合、舞踏会、訪問といったものの記述が多い。利発な女性であったオースティンはさまざまな人たちとの話題豊かなウィットイイな会話をおおいに楽しんでいるが、一方で相手によってはくだらないおしゃべりばかりと率直に姉に報告している。もちろん文学愛好家のオースティン一家だから、文学、特にこれまで読んだ小説に関する言及もしばしばされている。以上のような要約はジェイン・オースティンの手紙の特色、というより当時の女性の手紙の特色を示しているに過ぎない。そこで小説家オースティンが浮かび上がる文面を次に拾って見よう。

オースティンの小説の一番の特徴は、日常の平凡な状況の中で描き出される鋭い風刺やアイロニーを交えた諧謔性にある。しっかりとした人間観察を基に描き出す人間喜劇の状況は多くの読者の笑いと共感を誘う。同じことは手紙の文面にも言える。しかし手紙で相手が姉のように身内の場合、ついそれが書きすぎになつて読

者(本来オースティンが意識していなかった読者だが)の響感を買うこともある。次の一節はその典型であろう。

シャーボーンのみセス・ホールは昨日死産しました、予定よりも数週間早かったそうだけれど、何かに驚いたためらしいわ。うっかり夫の顔でも見たんじゃないかしら。⁽⁷⁾

多くの批評家がこの一節を取り上げ、オースティンは冷酷な女である、死産したのに同情のかけらもないと批判した。オースティンはユーモアのつもりで書いたのかも知れない。まさか後世の者が自分の手紙を読むとは想像だにしていなかったたであろうから。小説には描かれない出産や子沢山の話など、オースティンの美学では排除される話題が手紙には書かれる。その書き方が批判的なのは独身のせいかも知れない。例えば長兄の嫁メアリ(Mary)の産後の姿を次のように書き送っている。

メアリはちゃんと物事をしないから、見てる私もお産など自分はやるまいと思うくらい。身だしなみもだらしなしいし、部屋着のガウンも持っていない、カーテンは薄くて、万事がそのような状況をうらやましく思わせる快さや品に欠けるのよ。⁽⁸⁾

二二歳のオースティンはかなり痛烈に兄嫁を書いている。オースティンのために一言弁護しておく、彼女と兄嫁メアリは幼友達だったのだがいつの頃からか折り合いが悪くなった。推測であるが、たぶんその最大の理由はステイヴントン(Steventon)の生家をこの兄夫婦のために結果的に追い出されたためであろう。その体験は「分別と多感」の冒頭部分で戯画化されているのかも知れない。手紙の中で人の悪口を書くのもしばしばである。例えば誰それは「思ったより美人でない」とか、誰それは「大変愚かで怒りっぽい人だ」といったものだ。これも内緒話のレベルであるが、別の言い方をすれば、彼女の風刺精神の延長上にあるだろう。ダンス

パーティや会合などで出会ったさまざまな人間を風刺的に描き、悪口を言うというのも、基本的に彼女は観察者だからであろう。一步下がって、距離を置いて人を見る姿勢なのだ。口が悪いことについて「私は話題がないのでつい口が悪くなる」⁽¹⁾とも言う。それほど頻繁にこの姉妹は手紙を書いてもいた。オースティンは基本的に人間をプラス・イメージとマイナス・イメージに区分けする。後者についてはかなり容赦ない批判を手紙ではしている。小説ではそれを諧謔的に描いているわけだ。

ジェイン・オースティンの手紙は二〇歳代と三〇歳代では内容も変わってくるが、明らかにその辛辣さが違ってくる。年を取るにつれて辛辣ではなくなってくる。引用した二つの文は二二歳に書かれたものだが、このようない節は二五歳以降では少なくなっていく。オースティンの風刺性は「分別と多感」と「高慢と偏見」、特に後者に豊かに発現している。それはこれら二作が二〇歳代前半にその下書きを持っているからであろう。「分別と多感」の原案「エリナとメアリアン」、「高慢と偏見」の原案「第一印象」、いずれも二五歳までに書かれたというのが定説になっている。そのような若い時に書かれたものだけに、手紙と同じように勢いのある批評精神が出ている。対照的に「マンスフィールド・パーク」以降の作品はその明るい風刺性がどんどん少なくなっていく。つまりオースティンの風刺は若さ、活力といったものと関連性があり、また明るさとも関連しているということだろう。その陽性の笑いは後で述べる作者自身の置かれた状況の厳しさの中に少しずつ後退していくように思える。

年齢と内容の相関関係で言えば、二〇歳そこそこの手紙では頻繁にダンスパーティのことが書かれ、オースティン自身が踊りを好きなせいか、その楽しい雰囲気を与えているのだが、早くも二三歳の手紙で「踊りの相

手をされなくなる⁽¹²⁾」という一文があり、落胆の文面に読める。その頃ステイーヴントンの田舎やその近郊では「若い男性が少なくて寂しいパーティである⁽¹³⁾」とも書いている。ダンスパーティはオースティンの小説で男女の出会いのきっかけを作るといふ重要な役割を果たすものだが、その記述は年を追うごとに少なくなっていく。珍しく三三歳の手紙に「できるだけダンスパーティに行つていい掘り出し物 (bargain) を見つけましょう⁽¹⁴⁾」と精一杯の冗談を書いているのは、彼女たち一家がサウサンプトンからチョートンへ転居することが決まって、その喜びの現れである。もちろん「いい掘り出し物」とはいい男性のことである。しかしそのパーティは、

部屋はかなり一杯だった、踊っている人が三〇組位いただろうか、ただ悲しいことに十数人の若い女性が相手もなく、両肩をむき出しにして立っているのを見るのは悲しいこと。私たちが一五年前に踊った同じ部屋なのに。つくづく考えて、こんなに歳を取つたのは恥ずかしいけれど、今も昔と同じく幸せなので感謝の気持ちで一杯⁽¹⁵⁾。

現在の感覚では三三歳はまだ若いと思うけれども早婚時代のオースティンはかなり時の流れを意識している。以後はごくまれにダンスパーティのあったことが記されるだけになる。晩年の作「説得」はそのオースティンの気持ちをよく表しているだろう。またダンスパーティの場が描かれないのもそれを象徴している。

彼女の人生で転機になるのは二五歳の時のバース転居である。彼女は生れ故郷の田舎村ステイーヴントンをこよなく愛していた。そこを離れ、好きではないバースという歓楽の都会へ行かざるを得ない羽目になり、かなりうち沈んでいた。家財も処分して、大事にしていたピアノフォルテも手放し、愛読した書籍も処分した⁽¹⁶⁾。つくづく一家の恵まれない経済状況を思い知らされる時でもあり、まだ未婚の姉妹の不安定な状況を露呈した。

パース滞在中の一八〇一年五月末から約三年三か月もの間手紙が残っていないのも、その期間のジェインの精神状態を示すものではないだろうか。一八〇五年七月にパースからサウサンプトンに転居する。その時の気持ちを後に「「パースを」逃げ出せるというのは何と幸福な気分だったでしょう」と書いてある。ジェイン・オースティンの小説ではロンドンとパースがよく舞台として取り上げられるが、いずれの地でも主人公たちの身にはあまり愉快でないことが起こるようになっていく。都会と田舎の対比はいつも後者の精神的にも肉体的にもベターであることが示される。

ジェイン・オースティンの小説は男女の恋愛、そして結婚というハッピーエンディングのパターンを繰り返している。二〇歳代からの手紙において、彼女が男性のことや恋愛、結婚について身内の姉に書くことはごく自然のように思えるが、それをうかがい知ることのできる手紙は極めて少ない。これも姉カサンドラの検閲、処分によるものかもしれないが。その関係の手紙を拾って見ると、現存している一番古い手紙(二七九六・一・九)とその次の手紙(一・一四)の中で彼女はトム・ルフロイ(Tom Lefroy)のことを書いていく。彼はオースティンの伝記に出てくる最初の恋愛の相手とされている。彼女はその後生涯で四回ほど恋愛をしたことになっているが、その中でも彼女にとって一番惜しまれる、いつまでも心に残る相手としてトム・ルフロイが上がっている。彼は後にアイルランドで首席判事まで出世した男である。自分より一月若いだけのハンサムなこの男とオースティンは親しくなる。この男が当地を去る日に彼女が書いた手紙では、

金曜日——とうとうトム・ルフロイとたわむれる(Fine!)ことのできる最後の日が来ましたが、この手紙を

姉さんが受け取る頃にはすべて終わりです。そう考えると悲しくてこれを書きながら涙が出てきます。⁽¹⁸⁾

このように自身のことと感情をあらわにすることはオースティンの場合、極めてまれであるから、いかにこの恋愛が終わってしまうことが彼女にとつて悔やまれたかが分かる。トム・ルフロイは後にこれを回想して、「好きだったが若者の恋だった」と言っているのだが、二年後の一七九八年にサミュエル・ブラツコール (Samuel Blackall) という男性がオースティンを好きになる。今度は逆に彼女の方がそれほど好きになれず終わった。「彼の行動は」前よりも愛情がなくなり、分別が増しました、私はそれに満足しています」とはつきり決めつけている。ところが後で彼が別の女生と結婚するという話を聞いて兄フランシス宛に書いた手紙は次のようになっていゝる。

ミス・ルウィスがおとなしくて、ちよつと無知な女性、でも元々頭はよくて向学心のある女性であるといいわね、子牛のパイと午後のグリーン・ティー、そして夜降ろすブラインドは緑色を好むといった趣味の²¹。およそ一五年前に自分が振つた男性の結婚相手をこのように書いているのは意外とこだわりが残っている証拠だろうか。いささか痛烈な皮肉で、オースティンの意地の悪さと読めなくもない。伝記で恋愛の相手として名前が挙がっていて、手紙にも出てくる男性はこの二人の他にハリス・ビッグーウィザー (Harris Bigg-Wither) がいるが、特に私情を交えて書いていない。

このように自身の恋愛については驚くほど寡黙、あるいはカサンドラに処分されてしまっているのだが、抽象的なレベルでの結婚観はいくつか述べている。ある男性が結婚するという話に、

彼の期待通り、また家族の期待以上がいい人だといひ願っています。たぶんそうでしょう。結婚によつて人は大変よくなりますから。(Marriage is a Great Improver)⁽²²⁾

と結婚によって人間的に成長することを認めている。またある女性が再婚すると聞いて、最初の結婚が恋愛であれば許せないが、そうでなければ反対しないとして、

誰しも人生に一度は、それができるならば、恋愛によって結婚する権利があると思います。⁽²³⁾

オースティンにとっても恋愛結婚が理想であり、またその憧れが強いことを伺わせる。同様の趣旨のことは一番かわいがっていた姪のファニー・ナイト（Fanny Knight）宛の手紙でも繰り返される。彼女が客観的にはいいと思われる男性をどうしても好きになれず、オースティンが相談を受けた時、

非常に立派な男性であなたを好いてくれているのに残念だけど、愛情を抱けないのではしょうがない。愛情のない結婚なんて最低だから。⁽²⁴⁾

と言う。これは「高慢と偏見」でエリザベスが友人シャーロットに示す態度であり、「マンスフィールド・パーク」のファニー・プライスの姿勢である。「愛情のない結婚」という言い方はオースティンが繰り返して、彼女はそれを明確に否定している。彼女は現実にはそのような理想をかなえてくれる男性とめぐり合えなかつたわけだけでも、小説はその夢を実現しているのだ。逆に彼女の現実認識と小説の中でよく問題にされる独身女性の結婚意識を表すものとして、

独身女性は貧乏になるのが怖くて、それが結婚に走る理由です。⁽²⁵⁾

小説との関係で言えば、手紙は彼女が文学少女で少なくとも英文学の素養はかなりあることが分かる。一四八通の手紙の中に文学関係の作家の名前が七〇余人も出てくるのを見てもそれが分かる。牧師だった彼女の父は読書家だったから、その影響で一家はよく本を読んでいた。マーティン夫人（Mrs Martin）が経営する定

期図書購読者に加入したのもそのせいである。「我が家は大変な小説愛好者」⁽²⁷⁾だったのだ。後に彼女の小説家としての評価が高まり、摂政皇太子 (Prince Regent) もその愛読者の一人だといって仲立ちを通して摂政皇太子に「エマ」を献呈する話が出た時、その仲立ちの人がかなり高尚な牧師像をオースティンに描くよう頼んだ。⁽²⁸⁾ それに対してオースティンは断りの手紙を書いた。

でも私にはできません。滑稽な性格は私でも書けると思いますが、立派な、情熱的な、かつ文学に通じた人を描くのは無理です。そのような人の会話では私が全然知らない科学や哲学が話題に上るでしょう、そうでなくともさまざまな引用や古今への言及がふんだんに使われるでしょう、私のように英語しか知らなくて、その英文関係ですらろくに読んでいない者には無理です……私は精一杯の虚栄心で自慢してもいいと思います⁽²⁹⁾が、女性作家の中でも最低の教養の女だと思えます。

いかにもオースティンらしい文面である。彼女は自身の特徴をその謙遜性にあると認め、自分の定めた領域からは、教養の無さを名目の盾にして出ようとしない。同じ相手宛に、

……歴史ロマンスの方が私の田舎の家庭小説よりもいいでしょうが、私にはロマンスもエピックも書けません。とにかく私は私のスタイルで書くより他、しようがないのです。他のものは書いてもうまく行かないでしょう。⁽³⁰⁾

とも書いている。「私は私のスタイルで書く」、これがジェイン・オースティンが終生貫いた姿勢である。

自分の熟知した世界をしっかり構築し直して、一個の造形物として作り上げる、これがオースティンの創作姿勢である。姪のアナ (Anna)・オースティンが小説の原稿を彼女に添削してもらったが、その際彼女は次の

ように忠告している。

知らない所のことは書かない方がいいわ。その風習を全然知らないのですから。⁽³²⁾

自分がよく知らない領域のことは書かない、これは彼女の鉄則である。ごくまれにその鉄則を破ることがある。「マンスフィールド・パーク」の原稿の段階で「ジブラルタルの総督官庁 (Government House) と書いて後でそれを間違いと知り最終稿でそれを訂正した。それに関する手紙で、

サー・J・カーからジブラルタルに総督官庁はないことを教わりました。弁務官事務所 (the Commissio-
nary's) に訂正しなくてはいいけない。⁽³³⁾

海外のことは新聞や旅行記で読み、さらには海軍軍人である兄弟から情報を得ているわけだが、やや筆が走ったというわけである。しかしこれも非常に細部までこだわるオースティンの姿勢を表すものと受け取れる。「芸術家は何ごともいいかげんにしないものです」⁽³⁴⁾ という言葉通り、一字一句をゆるがせにしない。文章は一見したところ平易だけれども言葉の効果を考えて書く。文体に対する意識もある。

「彼は言った」とか「彼女は言った」とか付けければ会話がもつと分かりやすくなったでしょうが、でも

わたしはご当人が大した想像力もないような

鈍い頭の小人を相手に書いているわけではない。⁽³⁵⁾

田舎の一人身女性がつれづれに小説を書いたわけではない。このオースティンの姿勢を要約した言葉が有名な次の一節である。これは甥のジェームズ・エドワード (James Edward) に宛てた手紙の中であって彼の創作をコメントした後で、自分の小説に言及したものだ。

「私の作品は」その上にごく細かい筆で苦勞の後が残らないようにして描き込んだほんの小さい（幅二インチ）象牙のようなもの⁽³⁶⁾。

ここでもまた自分の描く世界が極度に狭いと卑下しているわけだが、それでもそれが芸術品であることを自身認めている。それと同趣旨の言葉で、同じく創作をしているアナ・オースティン宛の手紙の一節、

田舎村の三、四軒の家庭が作品を書くのに一番いい⁽³⁷⁾。

このような再三の彼女自身の言から、われわれはジェイン・オースティンの世界が狭いということに捕らわれて、彼女の実際の交際範囲までが狭いと誤解しがちである。しかしこの書簡集を通読すれば、多くの人間が登場し、多くの人間とつき合うオースティンの姿が浮かんでくる。彼女は田舎だけでなく、都会の人間も知っていた。小説はその人間観察のエッセンスでしかない。

現実を見つめ、観察し、そこからオースティンは物語を再構築していく。資料はあくまで彼女が熟知したものを使い、物語レベルは「ありそうも無いことは書かない⁽³⁸⁾」ことに徹している。それを丹念に練り上げていく。そして再度誤解してはならないこと、それは彼女の小説の作り方はまず観念から入っていること、先行する作家の小説群のパロディであれ、筋の組み立てであれ、登場人物の造形の仕方であれ、それらはまずオースティンの思考の中で観念的に整理されてから小説化しているということだ。そのことをオースティンは手紙の中でこう説明している。

大好きなジョンソン博士と同様に、私は事実よりも観念により関わっていると思います⁽³⁹⁾。

最後になるがオースティンは「分別と多感」、「高慢と偏見」、「マンスフィールド・パーク」、「エマ」の四

作について貴重なコメントを残していて、それぞれの作品について彼女自身がどう考えていたかが分かる。⁽⁴⁰⁾ われわれ読者がその作品解釈においてオースティンの説明に縛られる必要はないけれども、少なくとも参考意見として知っておいてもいいだろう。

(注)

- (1) *Jane Austen's Letters*. 現在このチャップマン編の版(オクスフォード大学出版局)は絶版になっていて、その改訂版がこの原稿を書いた後で出た。私が使用したのは一九七九年版。
- (2) 一八一一年・四・一八「以下手紙はすべてそれぞれの年月日で記す」
- (3) それぞれの空白期間は次の通りである。
- 一七九六・九・一八から一七九八・四・八まで約一年半
- 一七九九・六・一九から一八〇〇・一〇・二五まで約一年四か月
- 一八〇一・五・二六から一八〇四・九・一四まで約三年三か月
- 一八〇五・八・三〇から一八〇七・一・七まで約一年四か月
- 一八〇九・七・二六から一八一一年・四・一八まで約一年八か月
- 一八一一年・六・六から一八一三・一・二四まで約一年八か月
- 一八一四・一一(?)から一八一五・九・二九まで約九か月
- (4) *Ibid.*, p. xxxix.
- (5) 一七九八・一一・二四。

- (6) 一七九八・二二・二八。一八〇一・一・二二など。
(7) 一七九八・一〇・二七
(8) 一七九八・二二・一。
(9) 一七九六・一・九。一七九八・一一・一七。一八二三・一〇・一四など。
(10) 一七九八・二二・一八。
(11) 一八〇七・二・二〇
(12) 一七九九・一・八。
(13) 一八〇〇・一一・一。
(14) 一八〇八・二二・九。
(15) 一八〇八・二二・九。
(16) 一八〇一・一・一四。
(17) 一八〇八・六・三〇。
(18) 一七九六・一・一四。
(19) John Halperin, *The Life of Jane Austen* (The Harvester Press, Sussex, 1984) p. 62.
(20) 一七九八・一一・一七。
(21) 一八一三・七・三。
(22) 一八〇八・一一・二〇。
(23) 一八〇八・二二・二七。
(24) 一八一四・一一・一八。
(25) 一八一四・一一・三〇。
(26) 一八一七・三・一三。
(27) 一七九八・二二・一八。
(28) 一七九八・二二・一八。

- (29) 一八二五・一一・一六。ジェームズ・スタニア・クラークからの手紙。
(30) 一八二五・一二・一一。
(31) 一八二六・四・一。
(32) 一八二四・八・一〇。
(33) 一八二三・一・二四。
(34) 一七九八・一一・一七。
(35) 一八二三・一・二九。
(36) 一八一六・一二・一六。
(37) 一八一四・九・九。
(38) 一八一四・九・二八。
(39) 一八〇七・二・八。
(40) 一八一三年以降の手紙には自作の書評や評判を交えたコメントが多くの手紙に書かれている。その代表的な手紙の日付を順に追っていくと、
一八一三・一・二九。二・四。二・九。
一八一四・一一月(?)
一八一五・一一・二六。一二・一一。
一八一六・四・一。一二・一六。

(英米文学科 教授)